

Title	<書評> Mark McLelland and Annette Gofflieb (eds.), "Japanese Cybercultures", Routledge, 2003
Author(s)	バウエンス, ジェシカ
Citation	年報人間科学. 25 P.237-P.239
Issue Date	2004
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5524">https://doi.org/10.18910/5524</a>
DOI	10.18910/5524
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

*Japanese Cybercultures*, Edited by Mark McLelland  
and Annette Gofflieb, Routledge  
2003

ジェシカ・バウエンス

本書は英語圏初の英語圏外インターネットの使用についての論文集であり、インターネット上のコミュニティ構成と言語の役割を研究したものである。編集者は二人とも Queensland 大学に所属しており、ゴットリーブ氏は長年部落問題について研究を進め、現在コンピューター技術による日本語への影響を研究している。一方、マクレランド氏は日本におけるメディア、技術および性が交錯する領域を研究している。二人とも長年日本での研究経験がある。内容的には多様であり、キーンレとスタムラーによる宗教自己表現分析のように、方法論に焦点を当てた論文もあれば、フェリス・ショエルによるジャムセッションの経験を記述した逸話風のものもある。十八人の執筆者の内二人が日本人で、十四冊の論文は三部構成となっている。

第一章では、ゴットリーブとマクレランドは日本でのインターネットの発達の歴史をまとめ、従来のインターネット研究、携帯電話と「自己」、差別とアクティビズム、社会構造上の限界などを論じている。

第一部では、「ポピュラーカルチャー」に焦点があてられ、大学生のEメール使用と個人化・個人性・内面性、出会い系サイト、可愛い携帯、日本ノイズのサブカルチャーからサイバーカルチャーへの変容と初の大陸間インターネット経由によるブルースジャムセッションが取り上げられる。マクヴェイは、携帯電話によるインターネット接続は、資本商品主義と技術革新による内面化・個人化を促進させると主張している。「個人化」という概念はホルデンと鶴木

の出会い系サイト分析においても重要視されているが、ここでは個人化がより積極的に扱われ、社会化の構成の一部となっている。ヒョルトはサイバースペースの「可愛い文化」とジェンダー関係を考察し、「可愛い」サイトが使用者になじみ易く、「可愛い」と言うのは最早、女性特有の文化ではないと論じる。

第一部のなかではカスバリとマンゼンライターの日本ノイズ連盟についての論文が恐らく一番興味深い、彼らによると、インターネットはコミュニティを強化する効果がほとんど無く、それにはたいして分裂がさらに増したと結論づける。論集の中で一番読みやすいのはフェリス・ショエルのTokyo to Clarkdaleブルースジャムの物語で、インターネット上のコミュニケーションが常に新しいものを生み出すという積極的な結論を出している。

第二部では、ジェンダーと性を中心である。インターネット上の女性運動、インターネットと男性性、HIV患者を結ぶリンクとゲイ男性のインターネット上のクルージング（ハッテン）を扱っている。小野阪によれば、女性運動の一番大事な洞察は二つある。一つはインターネットのおかげで、一般では知られていない女性問題が認識され、二つ目は運動は都市部に制限されず、地方にも無限に広がる可能性がある。伊藤公雄先生にもお世話になったというダズグプタもこの地方に広がる運動の可能性に言及している。

HIV患者の間のコミュニケーションについてクリナネネは匿名性による「公の場でのプライベートな行動」の重要性について語っている。

ヤオイ研究なども行ったマクレランドはクルージングの場合においても、その公の場での匿名性の重要性を強調している、又、日本はインターネット上のゲイサイトの発達においてよく言われるように「(欧米に比べれば)遅れている」という発言に強く反発し、遅れているのではなく、カスタマイズされていると断言している。

第三部は政治と宗教を扱っている。進歩主義運動、聴衆と否聴衆の創造、部落民とインターネット、二〇〇一年歴史教科書、そしてエホバの証人と生長の家の自己表現が取り上げられる。マクニールの印象的な論文では、インターネット上の運動は社会に大きな変化をもたらすことができるかを検討し、結論としてインターネットに期待しすぎることには警笛を鳴らしている。マッキーも政治的に利用される場合、インターネットは変化というよりも保守的プロパガンダの手段となりかねないという。日本に住み、長い間部落問題を研究したゴットリーブはより積極的にインターネットを評価している。部落サイトは更なる差別的な標的になったと同時に、日本語だけでなく英語を使うことによって国際的な認識を上げ、国内のレベリングを拒否し続けている。デュッケは歴史教科書の件において、インターネットは役に立つツールであるが、作戦と態度に変化がなければそれほど運動手段としての結果が期待できないと述べている。

最後に、非常によくできた宗教自己表現分析では、キーンレとスタムラーは幾つかの重要な点を上げているが、最も重要な点は、インターネット上の活動が宗教の拡大、信者の増加という効果をもたらすことはできないということである。

本書の執筆者の多くが同じ分野の学者にとって興味深いと思われるサイトのURLなども提供している。メディア論やIT研究に関わっている人だけでなく、政治、ジェンダー、音楽、宗教などに興味を持つ学生にとっても有益な一冊だろう。